

2 中華亭という店

“ホームシックになるのはよくあることだ”と自分に言い聞かせた。“誰でもなるし、いつだってなる”。私が日本に来て2か月も経っていなかったが、もう既に家の親密な雰囲気が恋しかった。そのときから、初めに感じた新しい環境への魅力は、居場所が変わったことへの不安の気持ちへと置き換わった。どこでも見られる漢字はその魅力を失い、私の住む町を取り巻く緑の丘は壁のように思えた。私は人生で初めてよそ者になった。町を歩く人々の好奇をこめた視線や、何度も顔を見直されることが嫌で、思い切ってアパートを飛び出してしまうことを考えた。木々の葉が紅葉するころには、1年の契約期間を乗り切ったら、自分の“現実の人生”のために急いでアメリカに帰ろうと決意した。

センパイからのメールを受け取ったのはそのころだった。近くの“世界で最もすばらしい人たち”が経営するラーメン店——夫婦で経営する中華亭という店——でALTたちの集会があるという知らせだった。経営者夫婦は店を早く閉めて内輪のパーティーをするらしく、そこに、ふたりに会ったことのない私が招待されたいらしい。最初にしたのは、知らない人間のために店を早じまいしてパーティーをしても何の利益もないのに、なぜそうするのかという疑いだった。後になって事実を知ったとき、早まった判断をしたとわかって、あれほど恥ずかしく感じたことはない。疑いは持っていたが、家から出て社交的にならなくてはいけないとわかっていた。アパートに閉じこもっているとホームシックがひどくなるばかりだったので、センパイにメールを送ってパーティーに出席すると伝えた。

パーティーの日、私を車に乗せてラーメン店まで連れて行く途中、センパイは、私が“世界で最もすばらしい人たち”に会いに行こうとしていることを繰り返し話した。私はくすくす笑いながら“どうでしょうね”と答えた。店に着くと、センパイは、店の中に入るようにと熱心に勧めた。そこで私を迎えたのは居心地のよい雰囲気と、子どものころ祖母の家を訪問したことを思い起こさせるような食欲をそそる香りだった。マンガの本棚と小さな装飾品が壁に並んでいた。後ろではテレビがうなっていた。カウンターの向こうでは、日本人の夫婦がガスコンロを使っていた——その正確で協力的な動きは、ふたりの料理の腕前と経験の証明だった。次の瞬間ふたりは私たちを見つけて、料理の手を休め、自己紹介のためにカウンターから出てきた。夫は背が高く剛健で、信頼できる雰囲気を持っていて安心した。ほんの少しの灰色の髪が、彼の黒い髪を、まるで黒胡椒でいっぱいボールの中に入れた少量の塩のように際立たせていた。奥さんは背が低く、丸く美しい顔に穏やかな表情で、髪は肩までであった。穏やかな彼女の態度で、私の緊張はすぐに和らいだ。

センパイは私のことを、地元の高校に新しくやってきたALTであると紹介した。夫婦はまるで重要人物にでも会ったかのように熱心に聞き、うなずいた。主人は私に握手を求め“私の名はトモだが、パパと呼んでください”と英語で言った。

“私はユミコです”。奥さんは愛嬌のある笑顔で言った。

“いや、ママだ”と主人が訂正した。

私はほほえんだ。“ママさん、パパさん、会えてうれしいです”。

“私たちも”と、夫婦は一緒に言った。

互いにあいさつし合った後、夫婦は、料理ができあがるまで奥の部屋の他の客のところにいるように身振り手振りで勧めた。

奥の部屋には十数人の客がいて——スコットランド人に英国人、アイルランド人、カナダ人、アメリカ人、オーストラリア人、日本人の折衷的な組み合わせ——低いテーブルの周りに座って熱心にしゃべっていた。私も座って、弾みまくるピンボールのような会話を聞いた。ほとんどの客とは会ったばかりなのにもかかわらず、友人を歓迎する雰囲気があり、すぐに私は討論に加わった。その後しばらくして、ママさんとパパさんがテーブルをバイキング料理のように皿で一杯にし、私たちが手伝おうとするのを遮った。続いてビールとサケが運ばれ、形式通りのカンパイでパーティーが始まった。

料理と飲み物を味わいながら、ママさんとパパさんが皆と話す様子を見ていた。ふたりは誰とでも話を始め、熱心にうなずき、笑い、客の話を聞くより大事なことはないともいうように反応を返した。ふたりは全員の要望を意識し続け、料理や飲み物のために定期的に厨房に走っていくのにもかかわらず、会話を途切れさせはしなかった。私と会話する番が回ってきて、ふたりは私をこんなに長い間ほおっておいたことを謝った。それを聞いたことで、ある意味では、ふたりが本当に話をしたかったのは私なのではないかという気持ちになった。もちろん、そこにいたすべての客がそう感じていたのだが。

夫婦は、誰かと初めて会ったときに聞くようなことを尋ねた。歳は？ 23歳です。国籍は？ アメリカです。趣味は？ スポーツです。きょうだいはい？ 3人。出身はミルウォーキーだと言ったとき、パパさんはビールのグラスを掲げて大きな声で歌い出した。“ミュンヘン、札幌、ミルウォーキー！”私が当惑したのを見て、パパさんは、この歌はビールの産地として最もよく知られた3つの都市名をつなげたもので、1950年代のサッポロビールのCMソングのキャッチフレーズだと説明してくれた。すぐに別の日本人が歌に加わり、2度目のカンパイが始まった。パパさんは大笑いし、微笑み、そして話に戻る前にすばやく私のグラスを満たした。私の話にふたりがそれぞれ反応を示してくれるので、ありふれた内容であったことも気にかげずに、熱中して話し続けた。ふたりは私の気持ちを高めてくれる無邪気な魅力を持っていて、すぐに私はそれが狡猾さのあらわれではないと知った——ふたりの心の中にあるのは、新しい人々に対する誠実そのものの関心と、その人々をくつろいだ気分にするだけなのだ。

その夜どれくらいの時間話し続けたのかわからない。ただ、短すぎるように感じた。時々そうであるように、終電車が来るのがとても早かった。そして他の客たちと同様に、私もしぶしぶ立ち上がり、ママさんとパパさんがすべての客に感謝の言葉を述べている入口の方に向かった。私に別れのあいさつをするとき、ふたりは、これまで何年もの付き合いがあるかのように私を抱きしめた。

“また来てください”パパさんが言った。

“いつでも歓迎するわ”ママさんが付け加えた。

私はふたりのもてなしに大いに感謝し、また来ると約束した。

“私たちは・・・”とパパさんは言いかけた。しかし言葉を止めて奥さんの方を向いた。

“「楽しみに」は英語で？”

“We are looking forward to it”、奥さんは微笑んで言った。

“私もです”と言って、財布を取り出した。しかしパパさんとママさんはそれをしまうように言った。料理と飲み物の代金を払わせてくれるよう熱心に主張したが、ふたりは熱心に拒否した。とうとう私は屈し、ふたりに再び札を言い、本当に元気づけられた気持ちになって、他の客の後を追って店を出た。あの夜のできごとを頭の中で再生した：たくさんの国からやってきた十数人の人々が親しみあい、お互いに教えたり教わったりしていた。本当に不思議な夜で、私が初めて受けるような完璧なもてなしであふれていた。

’これがすべてだ’、私はセンパイの車に乗りながら思った。’私が日本に来た理由はこれだ’。

私の考えは顔に出ているらしく、センパイは笑って言った、“言った通りだろう”。

まだ彼らの明白な親切心が理解できず、“あの夫婦はいつもああなんですか？”とたずねた。

“そうだよ”。

“だけど、なぜですか？”

“そういう人たちだからさ”。

私はセンパイが運転している間中、その言葉についてじっくり考え、彼らの善意は自己の利益だけを考えるなら理論的に説明がつかないと結論づけた。だからこそ人の心を動かしたのだ。センパイが私を車から降ろしたとき、またママさんとパパさんに会いたいと言った。

“そういうと思った”とセンパイは言った。“月曜の夜に集まるよ。駅で6時半に待ち合わせしよう”。

“必ず行きます”。

一週間を過ごすうちにホームシックが解消して、中華亭への訪問を待ちわびる気持ちに置き換わったことを感じた。とうとう月曜日がやってきて、センパイと駅で落ち合い、ラーメン店へと車を走らせ、店の駐車場に車を止め、入口に歩いていった。ガラスの引き戸を開ける少し前、私はママさんとパパさんがカウンターの向こう側で冷静に働いているのをちらりと見た。パパさんは白いシェフズコートを着ていた。ママさんはブラウスとスカートの上に黒いエプロンをしていた。店に入ったとき、ふたりはおざなりに“いらっしゃいませ”と怒鳴ったが、私たちを見るやいなや、顔がぱっと明るくなった：ママさんはあの愛嬌のある笑顔を浮かべ、パパさんはのんきな微笑みを見せた。私たちはあいさつを交わし、ふたりはカウンターに座るよう身振り手振りで促した。あとでわかったことだが、そうしたのは、働いている間私たちと話したいからだった。手書きのメニューを丹念に読んでいたら、パパさんがカウンターに寄りかかって、ママさんがソバをパンケーキのようにして空中でひっくり返している間に注文するよりに言った。センパイが料理の名称をすばやく読み上げた。パパさんはうなずき、私の方を向

いた。馴染みのないメニューなので、後に私の答えの定番となった“サンデモイイデス”を言った。どの料理でもかまわない。パパさんは微笑んでオーケーと返事をし、即座にママさんへ、奥の部屋からの注文を叫んだ。

その時、レストランにいる外国人は私達だけだった。家族4人の一団が後ろに座っていた。スーツを着た2人の男が壁に向かって座り、騒々しくソバをすすっていた。年寄りの男がカウンターのもう一方の端の席に座り、マンガを読みながらたばこを吸っていた。やがて、別の外国人が店に入ってきた。彼女は近くの町で勤務するALTだった。ママさんとパパさんが彼女を見つけると、再びぱっと明るい表情になった。その後、また別のALTがやってくるたびに、ふたりは同じことを繰り返した。そのうちに外国人が6人に増え、私たちはカウンターを占領した。彼らが店に入ってくるたび、ママさんとパパさんは元気になっていった。その後2時間、ママさんとパパさんが働いている間、私たちはうしろめたい気持ちで料理を食べ、酒を飲み、しゃべりあっていた。

8時30分を過ぎた頃、パパさんは急いで外に出て、入口にぶらさがっているノレンを取り込み、ママさんは“中華亭”と漢字で書かれたネオンサインのスイッチを切った。最後の客が店を出てドアの鍵を締める時、ふたりは何度もお礼を言った。ふたりは席に座る前、さらに多くの飲み物、デザート、スナックを運んできた。そしてふたりと初めて会った夜にそうしたように、誰とでも語り合い、本当に楽しんだ。ふたりと私との会話は、前回来たときに話したこと

の続きから始まった。そしてふたりが私の話に関心を示す様子は、彼らが世界中の誰よりも私と話したがるのではないかと感じるほどだった。

最終電車の出発がまた早すぎて、私たちの会話はあまりに早く終わってしまった。そしてまたママさんとパパさんが入口に並び、来てくれたお礼を述べた。私たちは追加の料理や飲み物、スナックの代金を支払おうとしたが、ふたりは拒否した。払いたいと主張したが、ふたりは頑なだった。結局私たちは態度を軟化させ、ふたりはうまく言い抜けた子どものように微笑んだ。

“来週の月曜にまた！”そう言ってふたりは、私たちを強く抱きしめて別れのあいさつをした。それからふたりは通りに立って、駐車場から出る私たちのために車が来ないか見てくれた。私たちは車のウインドウを開けて別れの手を振り、ふたりに聞こえるように“おやすみ！”と叫んだ。私たちはそこを離れたが、その時からもう次の月曜を待ちこがれていた。

ママさんとパパさんに出会う前、私は日本にいるのは1年と決めていた。ひと月の間に気持ちが変わった。それは主に毎週の‘月曜夜のラーメン’と呼ばれる行事のためだった。イベントは私の1週間のハイライトとなった。素晴らしい料理、温かい雰囲気、そしてママさんとパパさんに会える機会。

秋から冬へと変わる頃、私の中華亭への訪問は頻度を増していた。店を訪れるたび、私はあの瞬間を期待して入口の引き戸を横切り、ふたりの表情が明るくなるのを目撃する。ふたりが働いている間、カウンターに座り、会話を大いに楽しむ。しかし本当の楽しみは最後の客が店

を出た後にある——ふたりがノレンを片付けてネオンサインのスイッチを切り、話しにやってくる時だ。ラーメンを出前したときのユーモラスな逸話から、ふたりがどうやって出会ってプロポーズしたかという魅力的な物語まで、訪問するたびに、ふたりのそばにいたいという私の願いは大きくなっていった。店で働いていた若者のひとりが、同じ年に母と祖母を亡くしたとき、ふたりは彼を保護して非公式に養子にし、仕事の見習いをさせた。ふたりのことを知れば知るほど、ますます人生と人間の尊さを知ることになった。そして私がふたりに会えてどれだけ幸運かも、ますます良くわかってきた。

私たちの関係はふたりの経営する居心地よい店を飛び出して、深夜のボウリング、カラオケ、ゴルフ練習場への遠足、ふたりの友人や家族との集まり、京都への日帰り旅行や地元の温泉への一泊旅行、そして店が休みの日の夕食への招待などへと発展した。冬が春へとその場所を譲ったころには、私にとってふたりは、父と母のような存在になっていた。ふたりの息子は私の兄になり、娘は私の姉になった。ふたりが私を息子であるかのように語り、我が家にいるような気分にしようと格別に気配りしてくれたとき、私は温かい気持ちになった。しかし、彼らがたくさんのことを私にしてくれたのに、私は彼らの寛大さに返礼することができそうもないことを後ろめたく思っていた。忠実な思いやりと多すぎるオミヤゲに釣り合うものが見つからなかった。そこである夜、私は、ふたりに対する感謝を表せなかったことが気がかりで、他のALTもそう感じていると話した。パパさんは眉にしわを寄せ、ママさんは信じられないといった目で見ていた。ふたりは混乱していると言った。ママさんが緑茶とスナックを運んできて、パパ

さんが説明した。つまり、ふたりの考えでは、彼らは私に恩義を感じているという。今度は私が混乱した。しかし、ママさんはバイリンガル辞書の助けを借りてふたりの考えを明らかにした。

“2年前、初めてALTに会いました。彼女が私たちの店に入ってきました。私たちはすぐに彼女の親善の気持ちに感銘を受けました。そのうち彼女は定期的に店を訪れるようになり、他のALTを紹介してくれた。新しく誰かを紹介してもらうたび、私たちは感激しました。あなたたちはみんな誠実で、正直で、好意的です——仲間同士でも、私たちに対しても——全員が違う国から来ていたとしても、それは変わりません。皆さんに会って私たちの人生は変わりました”。

とても驚いた。それは逆だ——ふたりが私たちの人生を変えたのだと言った。ふたりは微笑み、私たちは静かにお茶をすすり、お互いの言葉をじっくりと考えた。ママさんは奥の部屋に行き、2年ほど前に店に入ってきたあのALTからのはがきを持って戻ってきた。彼らはまだ連絡を取り合っている。ママさんとパパさんはアメリカの彼女を訪問するつもりだと言った。ふたりには初めての海外旅行になる。日本を離れてふたりに二度と会えなくなったらという考えで数か月憂うつだったので、それを聞いて安心した。それは、まさにJETプログラムの真の目的を理解した瞬間だった。私達は言語や文化の壁を超えて人生の友になり、太平洋でも私達の間を引き裂けないだろう。私はふたりに、いつか私もアメリカに帰ることになるが、そのときは会いにきてくださいと言った。

“喜んで”とふたりは言った。

“楽しみにしています”と私が言い、日本語に言い換えるために言葉を切った。

“日本語で？”

“タノシミニシテイマス、です”、パパさんが答えた。

私は微笑みながらその言葉を繰り返した。

一ヶ月が過ぎ、新任のALTが到着した。私はセンパイになり、新人をくつろいだ気分させるのは自分の務めだと気づいた。自分がよそ者だと感じていたことを思い出した——孤独とホームシックによって。そしてその治療法も思い出した。私のセンパイがそうしたように、新任のALTにメールを送った。私はママさんとパパさんのことを“世界で最もすばらしい人たち”だと話すとき、にやりとした——嘘だからではなく、本当のことだからだ。約1年前、私のセンパイが私をふたりに合わせるために車を走らせていたとき、どんな気持ちだったかを想像した。センパイは、私がお話を誇張だと考えて無視していたことを知っていたし、数時間のうちに私の疑いが晴れることも知っていた。だから私は、最初の中華亭への訪問の後で、コウハイたちを車で駅に送っていったとき、彼らから私がしたのと同じ質問をされても驚かなかった。

“どうしてあのふたりはあんなに素晴らしいんですか？”

そして私は答えた“そういう人たちだから”。

日本にいた2年間に、’月曜夜のラーメン’は、地域のALTが集まる小さな集まりから県のイベントに発展した。ロコミだけを通じて、たくさんの外国人が中華亭を訪れ、毎月曜に集まる

人数は3倍に増えた——そのうちの何人かは勤務日の夜にも店を訪れた。彼らALTたちは、何十軒ものラーメン店の前を通る。しかしママさんとパパさんの誠実さが素晴らしいから、またこの店に戻ってくる。友人や家族が海外からやってくると、私はいつでもこう言う、“京都は気にするな、東京も気にするな、中華亭に行きなさい。そこは本当の日本の魂と人情が見つかる場所だ”。そして以前皆がそうだったように、初めて中華亭を訪れた人は、入るときは疑り深い、出るときは畏敬の念を抱いている。端的に言えば、ママさんとパパさんは、私が会った中で最も素晴らしい人たちだ。ふたりは私の人生の展望を変え、人生で知りたいと思っていた以上の思いやりの心を教えてくれた。

何度も言われたのは、JETプログラムのメンバーである私達は文化の大使であり、私達との関係を通じて、地域の人々が私達の母国をどう考えるかが決まるということだ。しかし時々、私達が地域の人々からどんな印象を受けているかも考える——国際化を進める立場から見れば、両方とも同様にとっても大切なことだ。そう考えると、ママさんとパパさんに会った外国人が、ふたりに良い印象を持ってくれることが嬉しい。しかし私は、ふたりが与えてくれた影響にずっと感謝し続けるだろう。そして私は、ふたりに会ったすべての人が同じように感じると知っている。

だから、あなたが幸運なことに伊豆半島を訪れたなら、韮山駅から国道136号線を通って徒歩15分のところにあるすごいラーメン店——中華亭という店で、偶然にも世界で最もすばらし

い人たちが経営している。料理は極上で、仲間達はもっといい。そして——メロドラマのよ
うに聞こえるかもしれないが——あなたの人生を変えることを保証する。

そしてその店に行ったなら、カウンターの向こうにいるあのふたりにあいさつし、会えなく
て寂しい、愛していると私が言っていたことを伝えてほしい。